

境界の司祭としての菊慈童

松岡心平

いまの観世流「菊慈童」は、かなり単純な祝言能に仕立てられていて、それはそれで面白いのだが、説明不足の感はいなめない。

たとえばキリの謡には「いかにも久しき千秋の帝、万歳のわが君と祈る慈童が七百歳を、わが君に授け置き」とあって、七百年も若い美しさを保ちつづける慈童が、その七百歳の寿命を「わが君」である中国の帝あるいは日本の天皇に授け置くことが述べられる。

慈童の七百歳とは、どうやら「酈県の山路の菊水」の功德であり、その菊水の霊力の源は、「慈眼視衆生、福聚海無量」という、慈童がむかし仕えていた周の穆王から枕とともに与えられた句にある、ということとは全体から理解することはできる。

ところが、なぜ「慈眼視衆生、福聚海無量」の句が慈童や帝の寿命をのばすことにつながるのか、ということの説明は見あたらないし、慈童がなぜ「虎狼野干」が住み「人倫」が通わない酈県にいいのか、ということもよくわからない。これは現在の一場物「菊慈童」が、かつては二場構成で、前場では慈童が酈県に流される場面が描かれ、後場では「クリ」(サシ)「クセ」で「慈眼視衆生、福聚海無量」の句の由来が述べられていたにもかかわらず、これらが

すべてカットされてしまったことによる。かつての「菊慈童」で語られる慈童のお話しの全体を回復してみると、次のようなものになるだろう。

昔、周の穆王が八疋の天馬に乗ってインドに行き、靈鷲山で法華経を説いていた釈尊から、「治国の法味(国を治める経文)」「つまり「慈眼視衆生、福聚海無量」(『法華経』の要文)を授かった。中国に戻った穆王には寵愛していた稚児「慈童」がいたが、あるとき慈童は「王の枕を越える」という罪を犯したため、「人倫通はぬ」酈県という深山に流されることになった。その時穆王は慈童を哀れんで、ひそかにさきの句を枕に書きつけ、慈童に与えた。酈県に流された慈童が、この文句を菊の葉に書きつけたところ、菊の下露が落ちて霊薬となり、これを飲んだ慈童は不老の仙人となり、この谷の水を汲んだ人々も長寿を保った。七百年後、酈県の薬水のうわさを聞いた魏の文帝が勅使を派遣したところ、若いままの慈童が出てきて応対し、勅使を通して文帝に秘密の経文と菊水を授けた。

この話は、少々の変化は見られるものの、ほぼ同じ内容が『太平記』卷十三「龍馬進奏の事」の中で語られており(能の直接の典故とも

考えられる)、そこでは、この話のあとに次のような文言が付け加わる。

文帝これを受けて、菊花の盃を伝へて、万年の寿を成さる。今の重陽の宴これなり。それより後、皇太子位を天に受けさせたまふ時、必ずまづこの文を受持し給ふ。これによつて普門品を当途王経とは申すなるべし。この文わが朝に伝はり、代々の聖主御即位の日、必ずこれを受持したまふ。

ここでは、二つのことが述べられている。一つは、慈童が生みだした菊水は、「菊花の盃」つまり九月九日の重陽の宴の菊酒となり、その儀式は魏の文帝からおこって日本の朝廷まで伝えられた、ということであり、もう一つは、慈童が伝えた経文(『法華経』「普門品の要文」)は、中国で王の即位のときに授けられ、これも日本に伝わって天皇の即位のときに授けられることになった、ということである。この『太平記』の二つのメッセージはまた、能「菊慈童」の言外のメッセージであり、そこで示されるのは、菊慈童の話の出所が、じつは重陽の宴と即位法(式)という二つの場にある、ということである。

九月九日の重陽の宴は、中国渡来の儀式ではあるが、日本で盛んに行われたのは平安朝前期であり、その要は、天皇から菊酒(菊花酒)をふるまわれた群臣たちが漢詩を詠み上げて天皇の長寿を祈ることにあった。そうして制作された重陽漢詩の精華が、十一世紀初頭の『和漢朗詠集』「九日付菊」に収められ、このテキスト場を起点として、菊慈童説話が生まれてくるのである。

『和漢朗詠集』「九日付菊」の漢詩群のテキ

スト場を構成する主要なテーマは、「菊花酒」であり、「酈県の菊水」であり、また、魏の文帝（在位二一〇～二二六）が臣下の鐘繇に菊花を与え、菊を食べる七百余歳も長寿を保った古代の仙人彭祖にあやからせた、といった故事などである。酈県（河南省南陽市の西北地方）の菊水は、『風俗通』（後漢時代）に「南陽の酈県に甘谷あり。谷水甘美なり。云ふ、其の山の上に大いに菊有り。水、山上より流下し、その滋液を得たり。谷中に三十余家あり。また井を穿たず。悉く此の水を飲む。上寿なるものは百二、三十、中は百余、下は七、八十なる者、これを天と名づく。菊花は身を軽くし氣を益すが故なり」（読みは白川静氏「酈県小記」『觀世』一九七七年十月号による）とあるように、菊の滋液を含むミネラルウォーターであつて酒であつたためしはない。一方の「菊花酒」は、菊の花と茎や葉を黍米（きびの実）に混ぜて醸した酒（『西京雜記』）もしくは単に菊の花を浮かべた酒であり、もちろん「菊水」ではない。ところが能「菊慈童」では「酈県の山の滴り、菊水の流れ、泉はもとより酒なれば」と、菊水と酒の混同がおこっている。『太平記』でも、酈県の菊水が「菊花の盃」に重ねられており、混同は能以前からである。『和漢朗詠集』「九日付菊」にあつて、「菊花酒」と「菊水」が並んだことにより混同現象が引き起こされたのだろうか。

少年の貌あつて、更に衰老の姿なし。魏の文帝の時、彭祖と名を変へて、この術を文帝に授けたてまつる」とあり、「八百余年」という誤解はあるものの、慈童と彭祖と明記されるのである。

ともあれ、これら重陽の宴の漢詩のテーマ群の中に、慈童の名を見つけることはできない。要するに慈童は、別の由来から生まれた人物なのである。

慈童とは、中世に行われた天皇の即位灌頂、わけても天台即位法と呼ばれる、天台方から撰政・関白を通して新天皇に与えられる「治国の経文」（そのミニマムな形が「慈眼視衆生、福聚海無量」と、その由来を説く話の主人公として誕生した架空の人物であつた。

このことをはじめて明らかにしたのが、伊藤正義氏の「慈童説話考」（『国語国文』一九八〇年十一月号）であり、またこれに続く阿部泰郎氏の「慈童説話の形成―天台即位法の成立をめぐる―」（『上下』）（『国語国文』一九八四年八月号）によつて、慈童説話がどのようにして天台の世界の内部で発生、展開していったのが明らかにされた。

阿部氏によれば、慈童説話の生成を担つたのは、源信を始祖とおおぐ恵心流といわれる天台の中一派であり、この恵心流は一方で「稚児灌頂」という特異な儀式を生みだしていた。

稚児灌頂は、比叡山内の世俗の少年を稚児として聖化する儀式であり、少年が觀世音菩薩と同体となるために与えられるのが「慈眼視衆生、福聚海無量」という『法華經』「普門品」すなわち觀音經のエッセンスであつた。そし

て、觀音と同体となつた稚児ならば、僧は修行の一環として犯して良いとされ、稚児灌頂のあとに、稚児となつた少年を待ち受けるのが、僧との同衾作法であつた。

慈童説話にあつて、穆王と慈童との男色關係を前提にしてはじめて穆王の握つていた即位法が慈童に伝授される、というねじれた想像力と根を同じくする男色の論理が、稚児灌頂にも働いているだろう。さらに天台方が天皇に与える即位法と同じものが、比叡山の王ともいえる稚児に与えられるという点も、稚児と天皇制という問題へのヒントとなるだろう（松岡「稚児と天皇制」『宴の身体』所収）。

しかし、ここでは、「菊慈童」をめぐる天皇の問題をもう一つ別の角度から提起しておきたい。それは、すでに丹生谷哲一氏が「河原者・菊・天皇」（『日本歴史』一九九〇年三月号）で述べているように、穆王・慈童説話の「説話構造の背後に、正月に千秋万歳を唱え、重陽に菊を献じてきた中世河原者・散所者の世界があつたことを、看過することはできない」ということである。

平安朝前期から始まる宮中の重陽節句の風習に「菊綿」がある。前日に菊の花に真綿をかぶせておき、九月九日の早朝、菊の露つまり菊水にぬれた真綿で顔や体を拭くと不老長寿を保つとされた。十五世紀になると、主として河原者（庭の者）が、九月八日に御所にやってきて菊を植えていくことがおこなわれた。菊は「ほく（ほく）」ともいわれ、「ほくつくり」が河原者の別称であつた。声聞師大黒や散所者がその役を担うこともあつた。丹生谷氏はさらに『看聞日記』に「市、菊これを献ず。西

面にこれを栽う。菊綿例の如し。千秋万歳祝
着なり」(永享八年「一四三六」九月八日条と
見える御庭者市を取り上げ、市が伏見宮貞成
親王のところには正月には千秋万歳の祝言に参
上する芸能者で、重陽の節句には前日に菊を
献上していたことを明らかにしている。

市は、まさに『名語記』(十三世紀)に「千秋
万歳トテ、コノゴロ正月ニハ、散所ノ乞食法
師カ仙人ノ装束ヲマネビテ、小松ヲ手ニサシ
ゲテ推参シテ、様々ノ祝言ヲイヒツヅケテ、
祿物ニアツカル」と描かれる芸能者千秋万歳
である。菊慈童もまた、彭祖仙人であり、菊
水の酒を飲んで捧げ祝言の舞を舞い、七百
歳という「千秋万歳」を帝や天皇に授けるこ
とにおいて芸能者千秋万歳に等しい存在で
ある。

平安朝前期にはありえない形へと天皇制の
変質がおこり、中世の天皇は、裏で直接に大
地の地霊あるいはこれを管掌する境界者たち
と結ぶようになっていた。天皇が裏の領域で
直結する境界者たちによる菊や千秋万歳の祝
言の献上が浮上してくる中世という時代に、
即位灌頂という天皇の即位儀礼の新しい形も
出現するのであり、その由来をときあかす慈
童説話を天台の恵心流の人たちが作り上げて
いく過程で、稚児性と同時に境界者的芸能性
も菊慈童の中に植えつけられていった。

と同時にどうみてもユートピアでしかあり
えない中国の中央部に位置する「酈県」が、「虎
狼野干」に充ち、「人倫」も通わない荒蕪の境界
地として設定し直され、そこに境界の司祭と
して流され人の菊慈童が立つ構図が描かれて
いったのではないだろうか。(東京大学教授)